

# 1\_WALL

第10回グラフィック「1\_WALL」展  
2014年2月24日(月)～3月20日(木)  
公開最終審査  
2014年3月6日(木) 18:00～21:30  
FINALISTS ※五十音順  
Aokid 寿司みどり ナガタニサキ 山本歩美 横山萌果 Lee Kan Kyo

Grand Prize REPORT  
Graphic

## 第10回グラフィック「1\_WALL」グランプリ

# Lee Kan Kyo

ギャラリーでひととき異彩を放っていた作品が  
審査員の心を掴み、グランプリに!



Lee Kan Kyo  
1982年生まれ  
台湾出身  
東京造形大学大学院(造形専攻)修了

## 受賞作 『あの子のバッチ』

流行り!「あの子のバッチ」  
可愛い子たち 増殖していくから  
hey hey hey~  
自分だけのNo.1, みつけるかな?



## 第10回 グラフィック「1\_WALL」公開最終審査REPORT

2014年3月6日(木) 18:00～21:00

会場/ヒューリック銀座7丁目ビルB1 セミナールーム

JUDGES/居山浩二(アートディレクター、グラフィックデザイナー)  
柿木原政広(アートディレクター) 菊地敦己(アートディレクター)  
都築潤(イラストレーター、グラフィックデザイナー)  
長崎訓子(イラストレーター)〈五十音順、敬称略〉  
進行:菅沼比呂志(ガーディアン・ガーデン プランニングディレクター)

展示会場の壁一面に展示されたファイナリストの6つの作品。それを各審査員が一つひとつ入念にチェックしていく。「1\_WALL」展のグランプリを決める公開最終審査がいよいよ幕を開けた。ファイナリスト6名が一年後の個展開催の権利をかけ、自作品の説明や個展プランを自分の言葉でプレゼンテーション。一般見学者が見守る中、5人の審査員による議論の末に第10回グラフィック「1\_WALL」のグランプリが決定する。誰のプレゼンテーションが審査員の心を打つか、誰の作品が頂点に達するのか。





**Aokid** Aokid

『炸裂するように都市を作っていく、一方のバランス感覚がダンスなんだ。』



子どもの頃から思春期にかけてのイメージの延長線上にいて、遊ぶような気持ちで活動しながら世界に展開していきたい。このテーマを元に、ダンスや絵や街をつくっている。ダンスをしながらか絵を描くのではなく、それは必然的に地球が膨張するように僕の制作も日々膨らんでいく。

〈質疑応答〉

- 柿木原：絵を留めている四角い青のピースの説明をしてください。
- Aokid：前回「1\_WALL」展に出た時も使っていて、再利用した。ある意味、げんかつぎ。
- 都築：「街」をつくるといっているのはどういこと？
- Aokid：描き込まれた絵が「街」で、赤や青だけの絵は「ダンス」、点がいっぱいあるものは「宇宙」。街というのは「Aokid city」を表現した。



1



**寿司みどり** Midori Susi

『人物』



人間を観察するのが好きで、公共の場で意識することなく描いている。その時に感じた自分の中と外の世界がわからなくなる感覚や、それを破って集めた時に感じた社会と個人の境界線の揺らぎを表現した。一年後の個展では、それらをもっと掘り下げて展示したい。

〈質疑応答〉

- 長崎：人間が好きと言うわりに、絵を集めてつくった大きな人型のフォルムは攻撃的で、他人との距離感がよくわからないか？
- 寿司：好きというよりも興味があると行った方が正しいのかも。他人を遠ざけたい、近づきたいと思うのとは違う。
- 柿木原：やっていることは描く、貼る。あなたの思いを表現するのにそれでいいの？
- 寿司：個展をやるのなら、液晶を使った映像作品も合わせて展示したい。



2



**ナガタニサキ** Saki Nagatani

『LOVE&HATE』



私が普段から大切にしているのは、自分が気持ちよく楽しく描けるかということ。そのポイントのひとつに曲線がある。この作品は、「LOVE」という筆記体の曲線が好きで制作したいと思ったのがきっかけ。その強い思いを表現するために、シンプルな展示にした。

〈質疑応答〉

- 居山：選んだ言葉は絵に反映されているの？
- ナガタニ：はい。「HATE」の絵は「LOVE」と対比させどぎつい色にしようかと思ったが、まとめるために色を反転させた。
- 菊地：よく見ると、絵の構造がしっかりしている。目は意図して画面の中心に描いているの？
- ナガタニ：そうです。口を合わせて直角三角形になるように描きました。



3



**山本歩美** Ayumi Yamamoto

『えもじポップ』



日々、生活している中で浮かび上がってきた文字をグラフィック化して一枚絵に仕上げた。例えばモノクロの絵は、「石」という文字を象形文字風にしたもの。石本来の鋭さや歪な形を表現している。文字のできる作品の可能性をもっと広げていきたい。

〈質疑応答〉

- 都築：個々の作品の貼り方のバランスが気になるが、これは意図的なもの？
- 山本：はい。「田」は地面にあるので下の方に。「家紋」と「金閣寺」の作品は自分の中でかっちりした言葉というイメージがあるため、近くに配置した。
- 柿木原：文字の可読性を求めるよりも、絵と文字の関係をより見せていく方法論を考えた方が良いのでは？
- 山本：見せる過程で、少し説明的になり過ぎてしまったかもしれない。

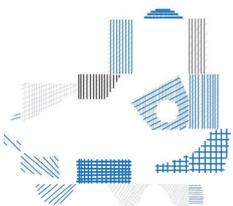


4



**横山萌果** Moeka Yokoyama

『PIECES』



ふと空を見上げた時、雲の中にくじらを見つけたとする。それを誰かと共感したい……。これは、パズルから着想を得た作品。一枚の紙を切り分けピースをつくり、組み合わせることで形を見つけ出す。絵の中に牛のモチーフを見つけ出した、その喜びを表現した。

〈質疑応答〉

- 居山：見方は人それぞれだと思うが、あなたは自分の見立てに共感してほしいの？
- 横山：わかるわからないではない。とっかかりを見つけ、気付く瞬間を楽しんでほしい。
- 菊地：ピースに使われている柄と形に関係は？
- 横山：柄は私がつくったピースの形から抽出したもので、それを組み合わせながら配置していった。



5



**Lee Kan Kyo** Lee Kan Kyo

『あの子のバッチ』



たくさんの女の子たちを一人ひとり見たくて、こうして並べてみた。レンズのような缶バッチに収まりきらない、手に負えない女の子たち……。アイドル界のめまぐるしくトップの座に入れ替わるようなスピード感、ファンがアイドルたちの缶バッチを買い集めることに似ていると思い、それを表現した。

〈質疑応答〉

- 菊地：外側にフレームのように並べられた缶バッチの形は何？
- Lee：テレビの画面でもあるし、看板でもある。台紙が黒なのは、秋葉原にあるようなアイドル看板の黒地に文字が光るイメージにしたかったから。
- 居山：そもそも、なぜ缶バッチを選んだの？
- Lee：缶バッチはグッズの中でも、うちわなどに比べて余分な機能がなく、商品としてシンプル。アイドルも缶バッチも商品としての価値がある。その二つを盛り込みたかった。



6

## ■審査員の感想

菅沼の進行で、今回の「I-WALL」展に対する感想を一人一人に聞いていく。菊地さん：「グラフィックデザインのプロとアマチュアが曖昧になってきている。だからこそ、グランプリを選ぶのが難しい」。柿木原さん：「出品者の可能性をどこまで加味して審査すればいいのか、どういった切り口で見ればいいのか……。こちら側が審査されている気分だ」。都築さん：「プロとアマチュアの線引きが難しくなっている中、審査側の僕たちはプロとしてどんな存在意義を持っているのか、突きつけられている気がする」。居山さん：「プレゼンテーションを聞くと、ちょっと頭でかちな感じがした。もっと作品づくりの根源的な部分を聞きたい」。長崎さん：「いい意味でも悪い意味でも、ピュアに一枚絵を描いて……という時代はなくなってきているんだなと思った」。

続いて、ファイナリスト一人ひとりについての感想を問うことになった。

○横山さんの作品について。都築さん：「作品自体はいいのに説明され過ぎると冷めてしまう。頭でかちな説明をせず、もっと自分の作品に自信を持っていい」。長崎さん：「ポートフォリオを見た時はすごくよかった。今回の展示では、壁面に対してのサイズ感が合っていなかった」。柿木原さん：「客観性や、第三者視点が少し足りていない印象を受けた」。居山さん：「彼女が言う牛のモチーフには見えなかったが形状や表面のグラフィックがよかったので、そこをもっと素直に出していい」。菊地さん：「絵のモチーフは彼女が言う牛でなくてよかったわけで、これは結果論的にできたもの。その可変性が面白い」。

○ナガタニさんの作品について。菊地さん：「日々描いている絵をまとめた冊子を置いた台は邪魔だった。絵の中の襟の裏側の色を変えるなど、繊細な部分もある」。長崎さん：「すばっと2枚の絵を展示したのは気持ちいい。空間を効果的に使っている」。都築さん：「筆記体の文字が目裏側を通っている。こういうのを自然にできるところがすごい」。柿木原さん：「作品を置いた台は直前になって置いたらしいが、これはいらなかった。もっと厳密に考えた展示を」。居山さん：「曲線が好きというがそれは文字だけで、絵自体に曲線を感じなかった」。



○Aokidさんの作品について。長崎さん：「青のピースは余分。見た瞬間、ああってなった」。菊地さん：「ポートフォリオより見づらくなった。絵は2段ではなく、1段に並べた方がよかったのでは」。柿木原さん：「確実に青のピースが邪魔。ポートフォリオは単体で魅力的だった」。都築さん：「ポートフォリオの中の写真などがよかった。あれを展示でも再現できたらすごく面白くなったはず」。居山さん：「今までは何でもかんでも動きにまかせて描くというのが魅力だったと思うが、今回はそこを突き抜けたものがあった。だからこそ、この展示はもったいない」。

○寿司さんの作品について。菊地さん：「説明を聞いて納得できたが、作品自体はまだ他にやり方があるのでは。独特なイメージをつくれる人だ」。柿木原さん：「考え方や発想、受け答えがわかりやすく魅力的だが、作品だけを見るとどうしても弱い」。都築さん：「極めて絵画的で大事なテーマを持っている。個展を見てみたい」。長崎さん：「ぶっつけ本番すぎた。インスタレーションの要素を出すならもっと出していい。絵は好き」。居山さん：「一つひとつの絵はいい。ざわざわする感じ。今回の展示を見たら絵を見た時に感じたものとは違うざわざわ感があった」。

○山本さんの作品について。柿木原さん：「ひとつずつちゃんとやればよくなりそうな作品」。長崎さん：「絵ではなく、印刷しても面白い。チラシの裏に描いた作品は子どもっぽい印象だが、伸びしろのある人」。菊地さん：「絵文字家として活躍してもらいたい。デザインする際に頼みにいきたい」。居山さん：「“家紋”を発泡スチロールでつくっているところが面白いと思っているようだが、絵文字としていいか悪いかを掘り下げてほしい」。都築さん：「まだまだよくなっていきそう。単純に絵文字としてどうなのかはあるが、展示のやり方として発泡スチロールでつくるのはいいと思う」。

○Leeさんの作品について。都築さん：「こんなに面白い作品が出るとは思わなかった。肖像権の問題でグレーに塗りつぶした機転もよかった」。長崎さん：「詰め込みすぎるところがあるが、今回は抜け感が出てよかった。表現を修正する能力もあり、実力のある人」。菊地さん：「一般受けするとは思わないが個性的。その味は意識して出せるものではない。プレゼンテーションも面白かった」。居山さん：「ポートフォリオではアイドルが誰なのか特定できるほど描き込まれていたが、そこが作品のよさではなかった。足の置き方とかだけで感じる、アイドル像がいい」。柿木原さん：「原宿のプロマイドがいっぱい売っている店のごちゃごちゃ感や、混沌とした感じと共通するところがある。このデフォルメが加減がいい」。

## ■審査員による投票

ファイナリストへの感想を聞いた後で、いよいよ各審査員が最終審査に入る。しばらくの間、誰も顔を上げない……。少し時間を置いたところで、各審査員の推薦するグランプリ候補2人を発表してもらうことになった。結果は……

居山 /山本 Lee  
柿木原/Aokid 山本  
菊地 /Aokid Lee  
都築 /山本 Lee  
長崎 /山本 Lee

これを集計すると、山本4票/Lee4票/Aokid2票

山本さんとLeeさんが4票ずつを獲得し、トップに並んだ。菅沼の進行で、山本・Leeの組み合わせ以外に票を入れた柿木原さんと菊地さんに、それぞれ山本さんとLeeさんを選んだ理由を聞く。柿木原さんが山本さんを推す理由は、「発展途上でも、可能性を感じる作品だった」とのこと。菊地さんがLeeさんを推す理由は、「個性が強く印象に残る作品。造形力があり、可能性がある」とのこと。菊地さんの提案で、山本さんとLeeさんに絞るのではなく全員が1人を選び直そうということになり、Aokidさんへの応援演説を聞いた。柿木原さん：「最初は踊りと絵どちらをやりたいのかわからなかったが、今は明らかに踊っていないとできない作品だとわかった。個展をやった場合に合わせる音楽がどんなものになるのか、期待している」。菊地さん：「彼のやりたいことを表現するには、空間全体を使った時に達成されるのではないかと思った」とそれぞれAokidさんを推した。ここで、各審査員が1人を選んで決選投票。結果は……Lee3票/Aokid1票/山本1票。グランプリは、3票を獲得したLeeさんに決定！会場からわれんばかりの拍手が沸き起こった。最後にグランプリを獲得したLeeさんに記念トロフィーが授与され、定刻をオーバーして白熱した公開審査が幕を閉じた。



## ■出品者インタビュー

横山萌果さん

ポートフォリオで表現したものとは違う展開を見せたいと思い、あえてイメージを変えてプレゼンテーションにも力を入れて最終審査に挑んだが、それを指摘する意見もあって反省した。ただ単に展示をやっただけでは得られないものがあり、勉強になった。

ナガタニサキさん

緊張していたので、終わってほっとした。プレゼンテーションが一番難しい。それに對してLeeさんのプレゼンテーションはとてもインパクトがあり、魅力的だった。私も弱点であるプレゼンテーション能力を強化して、審査員をうならせるようにしたい。

Aokidさん

今回は5回目の挑戦で、ファイナリストになるのは2回目。誰がグランプリに選ばれるのか、単純に審査結果を楽しんで聞くことができた。以前より自分の作品に対して説明できるようになってきているので、次回もぜひ挑戦したい。

寿司みどりさん

グランプリになれなかったのは悔しいというよりも、悲しい。作品が弱いと言われたのはショックだったが、指摘されてみればそうなのかも。アドバイスをいただいたのは、本当にありがたいので、今後に生かしていきたい。

山本歩美さん

グランプリをとれなかったのはすごく悔しい。しかし、自分の実力はまだまだだということ思い知らされた。今後もパソコンを使う創作方法ではなく、手描きにこだわってやっていきたい。

Lee Kan Kyoさん

グランプリになったことを、お世話になった先生方へ1番に伝えたい。来年の個展に向けて不安な気持ちもあるが、今は単純に嬉しい。1年後の個展プランとしては、缶バッジでオリンピックをやりたいと思っている。みなさん、ありがとうございました。1年後に会いましょう！

〈文中一部敬称略 取材・文/金子摩耶〉

■お問い合わせ先  
株式会社リクルートホールディングス ガーディアン・ガーデン  
〒104-0061 東京都中央区銀座7-3-5 ヒューリック銀座7丁目ビルB1F  
TEL:03-5568-8818 FAX:03-5568-0512 <http://rcc.recruit.co.jp>  
Twitter:@guardiangarden Facebook:facebook.com/guardiangarden.tokyo

Guardian  
Garden

RECRUIT